

「労作」という言葉を思う

中島 国彦

「労作」という言葉があるが、今回の受賞作は文字通りの意味で、自己の信じる方法で、対象を縦横に分析し、ある高い達成を示した「労作」と言うに値する著作と言えよう。著者の最初の書物でなく、一定のスタイルが出来たあとにまとめられた、力のこもった作業の記録といった色彩がある。

鈴木俊幸『近世読者とそのゆくえ 読書と書籍流通の近世・近代』は、書籍文化史を専攻する著者のフィールドノートとも言えるもので、江戸時代後期から明治初頭にかけての出版流通、それを支える出版人と読者たちの様々なドラマが、埋もれかかった書物や古文書から浮かび上がる。これまであまり知られていない固有名詞が、読みつづとんどん実体化されているのを見る面白さは、計り知れない。やや文献データを記した紙幅が多いが、丹念な記録は後世に資することになろう。

山本芳明『漱石の家計簿 お金で読み解く生活と作品』は、近代文学の流れを経済的視点から追求している著者の、新たな達成である。前著『カネと文学 日本近代文学の経済史』（新潮選書）の延長として、漱石における印税収入の問題、それを拠り所にした鏡子夫人や遺族の動きなど、これまで必ずしも明確にされてこなかった点についての、資料を充分踏まえた輪郭付けは、思わず読者を引き込んでしまう。個々の漱石作品にどういった経済的問題視出来るディテールがあるかについての言及もあり、作品理解の可能性を切り開いていることも特記すべきであろう。

文学と経済

関川 夏央

鈴木俊幸『近世読者とそのゆくえ 読書と書籍流通の近世・近代』では、たとえば江戸末期、下総・東金の書肆の経営のあり方に強く興味をひかれる。手習い塾、売薬を兼ねるその書肆で、手習いの束脩はひとり三朱弱、千百二十文平均である。主人は本を仕入れるための江戸への旅を繰り返し返す。本販売の利益率は高いが返品はきかない。自分の目と勘を信じるほかはないというスリリングな商売のありかたを、はじめて本書で知った。

ただし当初は、原稿用紙千五百枚分の質量にたじろいだ。三度目の挑戦で、ようやくこの本の読み方がいくらかわかり、近世日本の読者像を結像させることができた。まさに労作というべきであろう。

山本芳明『漱石の家計簿 お金で読み解く生活と作品』も作家とその家族の経済の話だ。夏目鏡子悪妻説があまりにかまびすしい印象だったので、それに疑義を持っていたのだが、この本にえがかれた鏡子は、すでに漱石没後だから悪妻とはいえないものの、ずいぶん大胆な（ときに軽率な）女性であった。第一次大戦バブル経済に翻弄されて火中の栗を拾い、相当痛い目にあった。この失敗を糊塗するために、漱石全集が何度も出され、結果として漱石の作品を世に定着させることになったとは皮肉だ。

人が恨みにも頼みにも思うおカネが作家の人生と作品を方向づける。そういうことを文学の側から追究する歴史学的成果として、今回の二作品は出色であった。

「文学」をめぐる流通と経済

兵藤 裕己

鈴木俊幸『近世読者とそのゆくえ』は、江戸から明治への移行期における書籍流通のあり方について論じた大著である。江戸・上方の三都にとどまらず、地方の中核都市における書店の活動を詳細に跡づけることで、幕末から明治初期の漢詩・漢学熱、新聞・雑誌等の新時代のメディアの登場、郵便・運送網の整備、普通教育の開始にともなう教科書特需などが、書籍の流通形態を変え、近代の読者を作りだしてゆく過程が論じられる。著者の鈴木氏は近世書物学の大家だが、ともすれば歴史のあなたに埋もれてしまうような膨大な一次資料を掘り起こし、近代読者の成立の一面を（具体的に）論じた意義はきわめて大きい。

山本芳明『漱石の家計簿 お金で読み解く生活と作品』は、作家漱石の活動を、経済面から読み解いた本である。作家として破格の高額所得者であり、市場社会の成功者だったにもかかわらず、漱石はその事実を忘れたかのように市場社会を嫌悪した。そんな漱石が抱えこんだ自己像の矛盾は、後期作品の主人公像にも投影しているという。また、漱石の没後、遺族や弟子たちが漱石という文化資産をどう運用し、その過程で「則天去私」神話が誕生したとする論の展開は興味ぶかい。なお、山本氏にはまた、「文学」を取り巻く言説編制と経済の関連を論じた『文学者はつくられる』という好著がある。